

論文の内容の要旨

論文題目 「白樺派」における他者としての〈朝鮮〉
— 柳宗悦と浅川巧の場合 —

氏 名 李 秉 鎮

本稿の主な内容は柳宗悦をとおして見た「白樺派」の他者認識の問題である。柳宗悦を中心とする理由は、西洋化による近代的自我の獲得の過程と、その反動として起きた東洋への回帰が、彼において極めて濃厚に顕れているからである。例えば、柳宗悦は西洋的な立場から朝鮮の美を発見する。こうした発見によって柳宗悦はどのような世界観を形成していくのか、という問題を検討する。同時に東西の差異を消滅させた「白樺派」の世界観との関係についても考える。明治期以来西欧文化へ傾倒し続けてきた日本は、大正期に入って〈人類〉という抽象化された普遍的概念によって、西欧文化の他者性を消去することで〈西欧＝日本＝人類〉という図式のもとに同一化する志向を示す。もちろん、柳の朝鮮に対する審美的な態度によって新たな問題が引き起こされるが、主体が見えなくなった大正的な言説空間に主体の見える批判を投じたのは柳宗悦であった。

しかし、他の同人と歴然たる差別性を持っていた、柳宗悦の朝鮮に向けられたまなざしには複雑な心理が含まれる。柳の朝鮮に向けられていた視線が、朝鮮という〈他者〉の発見には成功したが、西欧的芸術観の洗礼を経た柳の視線は、朝鮮芸術に対して奇妙な形をとる。こうした現象は、柳自身が東洋とか西洋とかという地理的区分は、〈芸術〉の世界においては無意味であり、〈美〉の世界においては東西を問わない、というよ

うな芸術至上主義の立場に立っていたからである。

柳が引き起こした新たな問題とは、彼が発見した朝鮮という〈他者〉が「美的態度」によって発見されたものだ、ということである。柳が朝鮮の「民芸」を高く評価したのは、東洋的な美が保存されている朝鮮の美を守るべきだという使命感からのものであった。それは西欧中心的な近代化によって失われつつある東洋的な美への柳のノスタルジーでもあった。そのような柳のまなざしからの発見、自分が東洋人であるという自覚は、西欧の芸術が普遍でありその立場から東洋、ことに朝鮮の美を普遍的なものとして発見しようとする態度であった。よって、一度発見された朝鮮という〈他者〉との現実、は、〈美〉という超越性によって解決できると柳は考える。そしてその志向は彼の美学理論として「民芸」論で完全に論理化される。そして柳の「民芸」論は、朝鮮の「民芸」品の美的価値を高く評価しながらも、それらを製作した朝鮮人には無関心であった。柳の朝鮮芸術論、とくに「民芸」論には人間不在の問題が伏在している。他の「白樺派」とは異なる朝鮮認識と、朝鮮という〈他者〉を発見した柳にしても、その底流には「白樺派」的な認識が流れていたのである。かえって、芸術をとおして人類の問題を解決しようとする世界観の論理的な根拠を他の「白樺派」に提供したのが柳であった。

こうした問題群を考えるときに、柳の「民芸」運動の欠かせない協力者であった浅川巧との比較をとおして「民芸」論を検討する。もちろん、浅川巧という人物が正式に「白樺派」に属していたわけではない。ここで簡単に柳と浅川の根本的な「民芸」論の違いについて指摘しておきたい。柳が主張する「民芸」論とは、民衆が日常生活のなかで使用する工芸品や雑器などに、新しい美的価値を与えることを意味する。経済的な余裕を持たない民衆が普段の日常生活のなかで使う用具は美的価値よりは、使用用途に合わせての実用性が重視される。柳は、用途に合わせて人々が毎日使う「民芸」品から人間の温かさを発見し、感動する。さらに柳は、「民芸」品というモノをとおして朝鮮という〈他者〉に出会う。一方、浅川巧は朝鮮で朝鮮の人々と一緒に生活しながら、自分も日常生活で「民芸」品を使いながら、朝鮮の人々と交渉する。浅川巧にとって「民芸」品は、朝鮮の人々との交渉の不可欠な手段であった。これに比べて柳は、朝鮮の「民芸」品をとおして想像としての朝鮮、美の世界としての朝鮮に出会った。少なくとも〈物〉の用途が重視される「民芸」品を論じる時、実際にその使用の世界に参加するか、しないかの差異は大きい。このような使用の世界に参加した浅川巧と、そうでない柳宗悦の朝鮮認識を比較し、そこから何が見えてくるかを考察するのが、筆者のねらいである。

そしてこれらの問題群を論じるとき、例えば「白樺派」と柳、柳と浅川、浅川と「白樺派」など、それぞれの差異について論述する。それらを俯瞰したとき、大正という言説空間のもとにそれぞれはどのように関係しているのだろうか。彼らの言説は〈自己〉から〈人類〉・〈自然〉・〈美〉などへと結び付き、多様で複雑な現実をそのもとに一元化する超越的概念を駆使するのである。